

さて、いきなり何故歌ではなく食べ物の話かと思われるかもしれないが少々お待ちを。私は「食」は気候に関係があると思っている。また食材自体の「旬」もあるが、自分の生命維持の「補給要求」もあると思っている。けだるい時季は甘いものが欲しくなり、暑い時季はスパイスが欲しくなり、寒い時季には塩分と脂肪分が欲しくなる。

そんなわけで急激に寒くなった日にコテキーノ(豚の腸詰サラミソーセージ)が食べたくなり、レンズマメがないのでキャベツと煮込んで食べた。脂で覆われた胃壁を抱えて、思考はトリッパ(牛の2番目の胃袋)やエスカルゴを思い出シジビエへとたどり着く。お蔭でその夜は、誰かとひき肉をこねている巨大な器へ近くにいた黒ウサギ集団の中の一匹が飛び込んできた夢を見た。そこで思い出したのが「ふるさと」という歌の歌詞である。「兎追いしかの山小鮎釣りしかの川」私はこれを聴いた子供の頃「兎美味しいかの山小鮎釣りしかの川」だと思っていた。「かの山」という山の兎は美味しくて、そこには川が流れていて鮎も獲れるのか。「かの山」はどこにあるのだろうか?と思いを馳せ「故郷のおいしいものが懐かしい!食べたい!!」的方向に解釈していた。

さて、このように言葉というものは時代によって変わってくるので誤解が生じないとも限らない。特に子供向け平仮名表記の母国語というのが落とし穴で、音だけで何の疑いもなく勝手な解釈へたどり着いた。更に歌詞は短い言葉で綴り、各時代、各国独自の感覚表現があるので普通の文章よりも「詞の訳」も「詩の解釈」も難しい。

そこで外国語の歌詞を考えてみる。ひとつの単語に含まれるいくつかの意味の中から、前後のつながりでどの意味を選ぶか?また風習的な表現をどう日本語に変換するか?「空が落ちる」という表現は直訳して解釈を想像してもらうこともできるが、フランス語の「3」は「少ない」を意味し「4」は「多い」を意味するところを言葉で訳すか意味で訳すか。「百」や「千」という言葉の配列は目で見れば見事な味わいだが、直訳すると多分その多さの違いのニュアンスは通じないと思うし、意識したのではどちらも「たくさん」で味気ない。そこで同じ言葉が繰り返される場所の訳では日本語のヴォキャブラリーを駆使して「同じ言葉なのに訳が違う?」と思われるも表現を変えてみるのも一案。イタリア語では「獣」は「荒地」という景色の意味もあるし、心理的に「空しい」意味もある。一律に動物的には訳せない。そしてさらに古語は注意を要する。例えば英語の *hast* は *thou*(汝)が主語の時の「*have*」に当たるとか、*shee* は「*she* (彼女)」の意味の他に「妖精」という意味があるとか、「ふるさと」同様、言葉の表現表記の違いは時代性を十分に意識しなくてはならない。そして今まで3度ほど遭遇したのは、フランス語の歌にドイツ語が含まれている場合、フランス語の訳者はそれが他国語であるという意識がなく、フランス語基準で訳しているのではないか?という疑問である。一文字の違いで別の意味になる単語があるのが悩ましい。

また「日本におけるドイツ年」である今年痛感したのは「歌の中には宗教性も含まれる」ということである。歴史と信仰。「詞」を訳すだけでなく「詩」を訳すためにはその背景まで知る必要がある。そこで初めて「歌」の解釈が成り立つと思う。それでも歌の解釈は詩人の思い通りにはならない。「こう解釈しています」「そういうつもりで書いたのではないけれど」人の頭の中での感覚は様々だ。ある意味「歌は食べるもの」その味わい方は「食」に対する意識と無縁でないような気もする。(2012.12.23)